

# 吉野作造（前期）のナシヨナリズム ——日露戦争から第一次世界大戦までの対応

氏 家 法 雄

## 1. 問題の所在

吉野作造（一八七八—一九三三）は、近代日本を代表する政治学者であるが、終生、キリスト教信仰を大切に貫いたキリスト教思想家としての側面も持ち合わせた稀有な存在である。吉野の憲政論・デモクラシー論に関してはすでに少なからぬ研究が存在する。しかし、そのキリスト教思想や日本の伝統との関係に關しての検討は十分になされていないとは言えない。吉野に限らず、在俗キリスト者の信仰や思想と実践に關しては多くの研究課題が残されている。筆者はこれまで、吉野作造について、その人間観と「神の国」観を取り上げてきたが、今回は、吉野のナシヨナリズムに論点をあわせ、その内実に迫る試みを行いたい。

まず最初に、筆者の問題意識について簡単にふれておきたい。

筆者はかつて拙論（「吉野作造の神の国——信仰の師・海老名弾正との対比から」）において次のような結論に至った。

既存の国家を「現在の国家生活を更により高き理想状態にまで普べき途中のもの観る」吉野の視座は、現状の国家

体制を絶対的なものと捉える「国家至上主義」を否定する。

海老名においては「大日本帝国」という一「国家」に独占的に配慮されていたキリスト教的真理は、国家から剥奪されることになり、「道理」等の道徳的原理を秩序の最根柢におくことで、道理を犯さぬ範囲内でのみ、国家権力の行使の有用性が認められるようになる。

また付け加えるならば、海老名においては、日本の海外膨張は、神意と同義であり推奨される対外政策であったが、吉野においては、国家が道義を体現するわけではないので、日本の対外政策に関しては諸手をあげての賛意ではなく、是々非々での対応となる。

海老名においては「大日本帝国こそ「神の国」であったが、吉野は国家を社会における「強制組織」の方面として空間的に相対化し、同時に現在の国家を不完全とすることで時間的にも相対的な存在へと追いやった。<sup>(2)</sup>

明治以降に再渡来した日本のキリスト教の躰きの石となった問題とは何かと問うた場合、それは天皇制を中心とするナショナリズムとの向かい合い方がそのひとつである。

伝道初期のキリスト者たちは、文明開化の追い風によつて、キリスト教＝文明のシンボルとしての受容が積極的に行われたが、国家が制度として確固たるものへと構築されるに従い、ナショナリズムとの関係が常に課題となつてきた。このことは内村鑑三の不敬事件（一八九〇年）を思い起こせば明かである。

さて、キリスト教の特徴は、この世のものをすべて相対化させるその超越性をそのひとつとして数えることができる。当然そこからは、救いを装う「地の国」たる国家そのものを「相対的」なものとして退ける視座が開かれ、ここに聖書で説かれる「地の塩」としてのキリスト教の役割を見出すことができる。<sup>(3)</sup>

明治日本における神学思想史を振り返った場合、国家乃至はナショナリズムへの態度はおおむねつぎのような三つ

のパターンに分類することができる。ひとつは、内村鑑三に代表される対決型、そしてひとつは、植村正久に代表される国家との棲み分け型、そして海老名弾正に代表される、一体型である。対決型とは、キリスト教のもつ超越的な救いの視座から、この世のものにすぎない国家・体制を不断に相対化させていく対応であり、<sup>4</sup> 棲み分け型とは、信仰における超越性の観点を保持しつつも、「公認教」としての枠組みに則り、信教の自由の範囲内で教会形成に専念する立場である。最後の一体型とは、キリスト教を「日本的基督教」として受容する、ナショナリズムとの積極的な一体化である。

歴史的にはキリスト教の主流派は、植村正久に代表される「棲み分け型」として受容されたフシが濃厚で、それが日本のキリスト教のひとつの特色となっているといってもよいであろう。<sup>5</sup>

しかし、これはひとりの思想家や立場に限定される問題というよりも、日本のキリスト教全般の問題とも言うべき事態であるが、そのなかで、やはり傑出した歩みを残しているのが筆者の注目する吉野作造ではないかと思われる。普遍主義と国家を超越する救いの視座を提示するキリスト教信仰の立場からナショナリズムとどのように格闘したのか。拙論「『神の国』観」では、吉野がその思想を円熟させるなかで、最終的には国家を時間的・空間的に相対化することの軌跡をたずねたが、本論考では、時期を区切って、吉野におけるナショナリズムへの対応を検討してみたいと思う。

論旨を先取りする形になるが、吉野のナショナリズムは、少年時代に培われた素朴なナショナリズムが出发点である。それがクライマックスに達するのが日露戦争であり、以後、ナショナリズムの傾向が衰微していくのがその歩みである。

そして最終的には、理想的状态として、ナショナリズムに対して批判的な理念となる「人道的無政府主義」<sup>6</sup>を提示する。本論考では、日露戦争前後の意識と、日露戦争後の展開に絞って確認してみたいと思う。

## 2. 日露戦争前後

2-1…吉野作造のナシヨナリズム

吉野が時代の潮流を本格的に意識した最初の歴史的事件は、日露戦争である。戦争勃発当時、半年後に卒業を控えた法科大学学生であった吉野は、本郷教会牧師・海老名弾正の主宰する雑誌『新人』にいくつかの短い日露戦争論を書いているが、その中で彼は日露戦争を進歩に逆らうツァーリズムの専制主義に対する戦争として位置づけている。

近世歐洲の政治的進化の跡を見るに、専制時代より民権論時代に移り……、今や個人の充実を基礎として鞏固なる団体的権力を樹立せんとするもの如し。独り露国は主義として今尚専制の政治を固執し、大勢趨行の当然たる自由思想の勃興をば強て圧抑して仮借する所なし。……今若し露国日本に勝たん乎、政府の権力一層強く圧制益々甚しからん。幸にして日本に敗れんか、或は自由民権論の勢力を増す所以とならん。故に吾人は文明のために、また露国民の安福のために切に露国の敗北を祈るもの也。

吉野は、海老名と同様に日露戦争は「義戦」であると定義し、戦争を自由と平和のためものと肯定した。ヘーゲルに依拠しつつ歴史の進歩の方向は「専制」から「自由」であり、日本の対露戦争を歴史を進歩させる戦いと認識した。専制主義・侵略主義ロシアの敗北こそロシア人に自由と民権をもたらし、アジアとヨーロッパに平和をもたらすという理由からである。この吉野の主張はその政治観にのみ由来するものではない。日清戦争を背景とする少年期に学校教育の中で教え込まれたナシヨナリズムに深く起因する。

我々の小学校時代——明治二十四五年頃の国民教育は、今から見ると滑稽な程排外的敵愾心を児童に鼓吹したものである。学校の唱歌は多くは勇壮なる軍歌で、其外には「三千余万の同胞共に、守れよ守れ我が日の本を……」とか、万国公法ありとても、弱肉強食の世の中には空論に畢ると云つたやうな六つかしい思想を歌はしたものだ。<sup>8</sup>

吉野が回想している通り、唱歌などを通して排外的敵愾心が鼓舞され、日清戦争が勃発すると、大いに興奮した。出征する第二師団を見送るために、学業そつちのけで停車場に見送りにでかけるほどの熱の入れようで「期せずして駅前集る幾千人とともに幾回か万歳を繰りかへした」。<sup>9</sup>

戦後の列強による三国干渉に対しては、「日東の大国民は將に世界の上に縦横の鉄道を布き経緯の運河を掘鑿して所謂諸列なるものを蹂躪し以て今日の辱を雪かざるべらず」<sup>10</sup>と主張している。少年・青年時代の吉野は、日本の世界的発展としての膨張主義を肯定し、その拡大発展に自らの使命感を重ねあわせるフシが顕著である。

さて、いうまでもないが、日露戦争を「義戦」とみる吉野の主張は、この時代において特別な考え方でもないし、広く認知されたそれといつてよい。少年時代より抱いていた「諸列なるものを蹂躪し以て今日の辱を雪かざるべらず」と時代を見る、少年時代より抱いていた使命感の延長上に出てきた世界観にすぎない。海老名に傾倒していたこともあり、内村鑑三らによる非戦論の意味にこの時の吉野は気づくことはなかった。

## 2—2—ナショナリズムの展開

さて、義戦を論じた翌一九〇五年、吉野は政治学におけるデモクラシーの主張として「主民主義」を主張している。

国家の到達すべき窮極の目的は如何と云ふ根本問題に対する哲学的解決は暫く之を避けん。最も卑近なる事実の観

察に従へば一刻の政治は先づ其国の生存發達を以て直接の目的とすることは些かの疑を容れず。而して国家の生存發達は人民全体の精神的並びに物質的平安進歩を謀ることに依りて達せらる。蓋し国家と人民とは元と利害を異にするものに非ず又異にすべき者に非ず（是れ国利民福と併稱する所以）。政治上諸般の施設の効果は須らく常に人民の利益の上に在らしむるを要するもの也。故に国家の生存發達を以て主要なる目的とする所の政治は、必ずや人民全体の安寧進歩を以て念とせざるべからず。<sup>11)</sup>

「民主主義」とは「主権の行動は人民全体の精神的物理的利益を保護進捗するを目的」とする政治方針のことである。学問の師・小野塚喜平次の「衆民主義」を更に徹底させ、政治の目的は国民の利益を守り増進させていくところにあるとする「民本主義」の原型をなす主張である。しかしここでは、政治の究極目的は「国家の生存發達」に求められている。「人民全体の精神的物理的利益を保護進捗」ための「国家の生存發達」を目的とする主張であるゆえに、現状では、普通選挙も政党内閣も先送りの理想的事項として語るに留まっている。

「民主主義」が内政に関する当時の吉野の主張の核心であったとすれば、日露戦争を経験した日本が取るべき外交とは何か……。

吉野は戦後の国際社会においては、日本の帝國的発展を樂天的に主張している。

吉野は、一九〇五年二月号の『新人』に無署名で「国家魂とは何ぞや」を発表し、日本民族の精神的理念となる「国家魂」なるものの戦後における拡大発展を説いている。

この「国家魂」の主張に関しては、社会主義者の木下尚江から批判がなされている。木下はキリスト教の普遍的理念である「人類同胞」の精神から、中途の段階に過ぎない国家とか、その国家を称揚するナショナリズムに困泥する吉野の姿勢を批判した。

この時代の吉野はキリスト教のもつ普遍性とカ理念性から時世に対する展開は後年にみられるほど顕著ではない。どちらかといえば、日本民族の枠組みとかそのナショナリズムの展開に執着している感が否めない。

木下の指摘する人類同胞主義は、「究極の理想」と認めつつも、その理想を直ちに実現しようとするのは「一足飛び」と吉野には映ったようである。吉野は「社会的意思の終局の発展を見るが為には先づ以て国家的発展を通過すべきこと」を強調し、国家を重んずることによって「四海同胞の大義」が実現できるという着実な理想主義の立場で答えている。

そして国家精神の理念に関しても、論争を通して、国家魂が各個人を統御する側面よりも、各個人が国家魂を形成していく側面に重点をおいてその議論を整理している。国家精神としての国家魂は、「受動的に国家精神の統御に服する」だけでなく「自発的に国家魂を作る」ゆえに、それは少数の「君主貴族」の意思ではなく「多数人民」の意思だと弁明している。<sup>13)</sup>

日露戦争前後の吉野の議論には、民本主義と国際協調への萌芽を見て取ることはできるが、必ずしもデモクラシーの徹底を要求するものではなかった。個人は国家なしには存在できないし、国民を統一している国家の権力は重要だとこの信念は否定することができない。人民の利益を重んじる吉野の主義は、国家の「生存発達」という究極目的に従属しているし、日露戦争論、国家魂論争で見えてくるのは、列強の凌ぎをけずる国際情勢のなかでは、日本の民族は他の民族より優先されなければならないという認識が強く存在する。海老名弾正の言う「戦争征伐」を全肯定はしないものの、あくまで日本の民族国家を中心におく強いナショナリズムを抱いていたことが理解できる。

### 3. 日露戦争から第一次世界大戦へ

3-1…吉野作造のナシヨナリズム

日露戦争後の状況を後年吉野は次のように振り返っている。

日露戦争が一方に於て国民を帝国主義的海外発展に陶醉せしめたと共に、他方国民の自覚と民知の向上とを促して自らデモクラチックな思想の展開に資したことは、既に人のよく云ふ所である。私は明治三十九年の一月から支那に赴いて滿三年を彼地で暮し、日露戦争の直接の影響として起つた中国の立憲運動の旺盛なるに驚いたのであるが、明治四十二年一月日本に帰つて来て民主思想の大に興隆しつつあるに一層の驚きを感じたのであつた。<sup>(14)</sup>

日露戦争は吉野のナシヨナリズムを自覚させるとともに、時代認識を導く指標としての「デモクラチックな思想の展開」を自覚させた歴史的な事件であつたが、さらに吉野の認識を新たにさせたのが、講和後、各地で勃発した「民衆的示威運動」である。

ポーツマス講話条約では、賠償金がなく、領土の割譲も少なかった。戦時下を堪えてきた民衆の不満はここに来て爆発、日比谷焼討事件をはじめ暴動が各地でおこつた。政府への不満に対する民衆の自発的な暴動に吉野は大きな衝撃を受けた。吉野は日比谷焼討事件について「民衆が政治上に於て一つの勢力として動く<sup>(15)</sup>」という時代の始まりだと捉え、国家の側から民衆を規定するのではなく、民衆そのものが国家の動向を決していく「デモクラチックな思想の展開」に、以降のデモクラシー論の構成を加速させていくこととなる。そのことはとりもなおさず、日本の民族国家を中心におく強いナシヨナリズムの再考を促すことにもなる。

## 3-2-2 ナショナリズムの展開

さて一九〇六年から三年間の中国・天津での生活、そして一九一〇年から三年あまりの欧州留学を経験した吉野は、第一次世界大戦の最中である一九一六年一月に「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」を発表して注目浴びることとなる。この論説の中で吉野は、主権在民としての「民主主義」は日本では危険視されるとして排除し、内実としてのデモクラシー論として「民本主義」を説くこととなる。

吉野は民本主義を説いた理由を、憲政論を掲載した『中央公論』の同じ号に「精神界の大正維新」として発表している。<sup>(16)</sup>吉野は政界の根本改革のためには「精神界の刷新運動」が必要であり、「国家として偉大にして国民として縮小せる我が国の現状に対し一大革新の必要」を説いている。なぜなら「真の偉大なる個人の上に於ても亦た偉大なる国民たらざる可らず」だからである。

では、日本人が国民として、そして個人として萎縮してしまった原因とは何か。

吉野は「多年独逸流の国家主義を実施したる結果」だと認識する。長くなるがその前後を見てみたい。

我政治界に対する大正維新の運動、即ち憲政擁護運動は、吾人が會て屢々論じたるが如く全然失敗に帰したり、而して政界は全く中心力を失ひ混沌として其紛擾日に益々甚しからんとす、故に政界の刷新は有識者の最も心を勞すべき問題たるは論を待たずして、吾人亦た機に触れ折に接して論説を怠らざるべし、然れども政界根本の殷賑は国民の精神状態を一新するより起らざる可らずして、一種精神にして偉大なる理想の発現して我精神界を刷新するに至らば政界の事蓋し亦た見るに足るものあるに至らん、殊に多年独逸流の国家主義を実施したる結果、国民を軍隊視するの傾きありて、個人の自然的發育を害する少なからず、想ふに或る意味に於て独逸流の応用は富国強兵の政策を行ふに頗る便利なることあるは否定す可らず、現に独逸の今日ある又我邦が近年長足の進歩を成せる、組織的国家主義に負

ふ所甚だ多きは賭易き道理なり、然れども現在の国難に際し英仏両国民が能く発情興起し克く其智力を尽して倦まざる状態を見れば個人主義亦た実に侮る可らざるを知らん、而して戦後の黒繩を予想せば吾人は勝敗の如何に関はらず英仏の状態が必ず大に独逸に優るものあるべきを信じて疑はず、<sup>17)</sup>

英仏の個人主義とドイツの国家主義を比較した場合、「英仏の状態が必ず独逸に優る」との主張である。吉野は、明治国家が学校教育を通して創り出した国家主義の精神に対して距離を起き始め、その発想を相対化する言葉を述べている。そしてその改革の一つの方途として提示されたのが「民本主義」の主張である。

国家主導よりも、民衆の側からのアプローチという吉野の発想には、三年あまりにわたる欧州留学での経験が実は大きく影響しているようである。

留学三年にあまる幾多の見聞が後年の私の立場の確立に至大の関係あるは勿論だが、中に就き特に茲に語っておきたいのは、(一) 英国に於て親しく上院権限縮小問題の成行きを見たこと、(二) 奥都維納に於て生活必需品暴騰に激して起つた労働党の一大示威運動の行列に加はり、その秩序整然一糸みだれざるを見て之こそ国民大衆の信頼を得るに足るなれと大いに感服したこと、(三) 一九一二年の白耳義の大同盟罷業を準備段階から目のあたり見聞し、秩序ある民衆運動の如何に正しく且力あるものなるかを痛感せしこと等である。<sup>18)</sup>

(一) は一九一一年八月のイギリスにおける議員法制定のことである。一九世紀以来問題となっていた上下両院の対立が、国民の支持を背景に、保守派の牙城と目される上院の権限縮小に関する議院立法の提出とその成立のことである。吉野は当時ウィーンに滞在中であり、ロンドンの地を踏んだのはその二年後のことであるが、イギリスにお

る議会制度、そして民主化の動向を見聞した体験は、吉野の民本主義形成、国家主義的態度の抑制に大きく働いたことは容易に理解することができる。

(二) で指摘するのは、ウィーンでの物価上昇に対する市民のデモである。吉野はこの集会に参加するなかで、警備の警官とデモに参加した人々の両者の態度にいたく感心したようである。(三) に挙げたベルギーでの大同盟罷業の見聞と民衆運動のあり方についても同様の感想を抱いており、一見すると無知無学とされる労働者、女性、工員といった人々が規律ある態度を取り、節度ある社会参加をする機会に恵まれたことは、国家の側から民衆を律していくのではなく、民衆の側から国家をデザインするという発想と理解を深めるうえで、大いに役立つたようである。<sup>(19)</sup>

先に論じたとおり、ヨーロッパから帰国後、日本でも台頭する民衆運動を目の当たりにした吉野は、一人一人の民衆に基礎付けられた新しい政治の時代、国家像の時代が到来したことを確信する。そして「民衆政治と云ふものは是れ一の勢である、世界の体勢である」という固い信念を根柢にもち、デモクラシーの実現に情熱を燃やすこととなる。

しかし、だからといって吉野自身のナショナリズムは全否定されたわけでもないし、もっぱら個人主義を鼓吹するようになったわけでもない。「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」を発表した同年九月、「国家中心主義個人主義 二思想の対立・衝突・調和」を発表するが、二つの主義の「対立・衝突」を避けて「調和」を計るようそこでは議論されている。

国家の政策の根本的決定に方つては、国家中心主義と個人中心主義との二つの主張が兎に角事実上対立して居ることとは疑いない。蓋し全体を重んずる思想と分子を重んずる思想との対立が複雑なる有機体に於て免るべからざるものなる以上、我々は国家的団体に亦此事あるを怪しまない。<sup>(21)</sup>

処女論文「ヘーゲルの法律哲学の基礎」(有斐閣、一九〇五年)で示した国家を「有機的団体」として理解する国家観は依然としてそのままである。国家は国民と呼ばれる特定の個人の集合から成り立つ「有機的団体」であり、国家と個人は「団体」と「分子」として対立するのではなく、互いに調和補完し合うなかで、ともに成長発展を遂げるべきとの国家観がそれである。その立場から、国家中心主義とは「全体を重んずる思想」であり、「分子を重んずる思想」が個人中心主義とされ、吉野は両者の極端な形、弊害を論じつつ、その両者を両立させようとした。「予は決して国家本意の政論政策に反対なのではない。只我国今日に流行する国家中心主義には一大陰翳の附き纏ふものあるを認め、個人中心主義の高調に依りて国家中心主義を正路に導かんことを冀ふ」と慎重に自己の立場を吐露しつつ、極端な国家中心主義には反対の意を表明しているにすぎない。また個人中心主義の内容も曖昧なままである。論旨としては、やはり「偏狭なる国家中心主義の跋扈する時幣に憤慨」し、それに対する違和感を感じながらも、ナシヨナリズムを否定する、乃至は国家を顧みないかたちでの個人主義を鼓吹することはできないようであった。

日清戦争を経験した少年時代、そして「義戦」と捉えた日露戦争当時ほどのナシヨナリズムの気配はこの当時に吉野に感じることはほとんどできない。しかしナシヨナリズムを保ち、国家に一定の有用性を見るのは、やはり「国際競争の激烈」を無視できないからであろう。この文章が書かれた当時はちょうど第一次世界大戦の真っ直中である。

然るに今度の戦争は、更に又一艘国家本位主義的傾向の極端なる主張を見るに至らしめた。此思想は今や殆ど凡ゆる有力なる階級を風靡して、個人中心主義に対しては殆ど圧迫的態度を以て臨んで居る。何故かと言ふに、従来個人中心主義者の主張して来たやうな議論は今度の戦争で殆ど一つも実現していないからである。先づ第一に個人中心主義者の動ともすれば唱へて居つた所の国際的正義とか或は国際法とかいふものは、今度の戦争で全然蹂躪されて居る。蹂躪するのが善いか悪るいかは是れ所謂学者仁人の机上の空論であつて、正義も国際法も武力の前には全然無能であ

るといふことだけは目前に示された間違いない事実である。イザと云ふ時に物を言ふのは即ち「力」の外にはない。而して独逸は此「力」に最も重きを置いたがためにあれ程見事な成功を博した。<sup>(22)</sup>

世界大戦の事實は「イザと云ふ時に物を言ふのは即ち「力」の外にはない」という力の現実を突きつけるものであり、その現実を前にしては吉野も理想主義的に道徳や正義を語ることは出来なかつた。その文脈から日本が植民地として支配する異民族の朝鮮人に関しても「我々は日本帝国の立場から、朝鮮によつて統一的結束の累せらるゝことを欲せざると共に、又朝鮮人の自由開発の要求に向かつて、大に之を聴容するの寛量を示さなければならぬ」と歯切れが悪い。

#### 4. 最後に

こうした吉野のナショナリズムは第一次世界大戦中は維持されることとなる。

少年時代に培われ、日露戦争でクライマックスに達した吉野のナショナリズムはヨーロッパでの留学経験での知見、勃興する民衆運動を前に、一定の相対化を招くこととなった。また政治におけるデモクラシー論に関しても一九〇五年に提唱された「民主主義」では時期尚早として見送られることとなった政党内閣制と普通選挙制度の要求は「民本主義」の主張では盛り込まれることとなった。

しかし根本には国民国家体制を脱構築するような後期吉野に顕著に見られるような視座（人道主義的無政府主義）は、この時点ではまだ見て取ることが出来ないのも事実であり、そのためには、第一次世界大戦の終結と戦後の国際協調体制を待つ必要がある。

一八七八年（明治十二）に生まれた吉野作造は、明治青年のナシヨナリズムを深く共有していることは疑いない。明治期のナシヨナリズムは、国権意識と民権意識の混同をそのひとつの大きな特色とするが、吉野作造もその陥穽を免れることはできなかった。当時としては進歩的な発言と見ることも可能だが、ナシヨナリズムの範囲内での発言がほとんどである。しかし時代状況との対応のなかで、吉野はナシヨナリズムを相対化し、国権意識と民権意識を整理し、民福増進を図るようになる。その意味では、吉野の歩みはナシヨナリズムとの対峙、脱構築とみることも不可能ではないだろう。

最後にキリスト者としてのナシヨナリズムとの対応に関してひとつみておきたい。  
教会史家の山路愛山は、近代初期の日本のキリスト教入信者たちの特質を次のように見た。

かくて時代を謳歌し、時代とともに進まんとする現世主義の青年が多く戦勝者及び其同趣味の間に出で、時代を批評し、時代と戦はんとする新信仰を懐抱する青年が多く敗戦者の内より出でたるは與に自然の数なりきと云はざるべからず。総ての精神的革命は多くは時代の陰影より出ず。<sup>24</sup>

周知の通り、初期のキリスト者は佐幕系諸藩の武士階級の人々がほとんどである。明治維新をただの政治維新とみて、それ以上に精神的維新の必要を見てとり、キリスト教信仰によって愛国とナシヨナリズムが完成されるとの気が著しく強い。吉野の信仰の師・海老名弾正もその例外ではないし、福音主義の頭領と目される植村正久も、無教会主義の内村鑑三もその例外ではない。敗残というルサンチマンと著しい気負いが初期のキリスト者に共通して見て取れるメンタリティーである。

吉野作造は武士階級の出身ではない。

「私は東北の片田舎の一商賈のせがれである」<sup>(25)</sup>。

しかしながら、生家は宮城県志田郡大柿村（後の古川町、現在の大崎市）であるから、旧仙台藩に属した地域である。旧仙台藩は戊辰戦争では幕府側につき敗者となったため、明治新政府となった薩長藩閥に対する抜きがたい反感が人々の心に深く根を下ろしていたようである。<sup>(26)</sup>

吉野に深く影響を与えた海老名弾正はナショナリズムと信仰を一体化させるなかで自己の使命を確認したが、吉野作造はその両者を分離することが自身の使命となった。

二人には牧師、信徒、そして世代や出身階級の違いは歴然として存在する。

一方は時代状況にのみこまれたとすれば、一方は時代状況と対応するなかで、ナショナリズムと信仰を区別していくようになるが、そのあたりの消息を、海老名との対比だけでなく、木下尚江との対比のなかで、キリスト教の受容過程として丁寧に明らかにする必要があると思われるが、それは後日の課題としたい。

【註】

- (1) 「吉野作造の人間観——海老名弾正の神子観の受容をめぐる——」〔『東洋哲学研究所紀要』第二〇号、東洋哲学研究所、二〇〇四年〕、「吉野作造の「神の国」観——信仰の師・海老名弾正との対比から」〔『東洋哲学研究所紀要』第二一号、東洋哲学研究所、二〇〇五年〕、これらの論文で目指されたのは次の通りである。すなわち、吉野に知的・精神的影響を多大に与えた海老名弾正と吉野自身の思想の連続と断然という問題である。海老名は周知のとおり、熊本バンドで信仰をスタートさせたが、その言説は国家的であり、愛国主義のそれである。海老名は時代状況に対するブレが多く、国際主義を説く側面もあれば、贖罪意識を著しく欠如した「日本的基督教」を説いたりもする。吉野自身は「僕の思索生活に最も大なる影響を与へた具体的事実はないかと反省してみると、大学生時代に聴いた海老名弾正先生の説教が夫れであると思ふ」〔吉

野作造「予の一生を支配する程大いなる影響を与へし人・事件及び思想」、『中央公論』一九二三年二月。と語りつつも、海老名と同じ主張は選択していない。その足跡はデモクラットとしての歩みであり、個々の存在者への視点を第一におくキリスト教に根差す人格主義の主張がそれである。では吉野はそうした海老名から何を受け継ぎ、何を批判的に組み立て直したのか、その消息をあきらかにするのがふたつの拙論の狙いであった。

(2) 「吉野作造の『神の国』観——信仰の師・海老名弾正との対比から」、『東洋哲学研究所紀要』第二一号、東洋哲学研究所、二〇〇五年、一一五—一六頁。

(3) もちろん、国家への迎合・一体関係としての国家教会主義も歴史的には存在することがその議論はここではひとまず措く。

(4) 内村鑑三の場合、「ふたつのJ」が当然問題になりそのナショナルリズムの言説は、キリスト教によって完成させるという示唆が濃厚だが、いずれにせよ、国家主義的公定ナショナルリズムとは対立する。

(5) 鈴木範久『日本キリスト教史物語』教文館、二〇〇一年、一〇二—一〇三頁。同書は、大都市の知的勤勉層を中心に受容された日本のキリスト教の特徴として次のように指摘している。「一般信徒は、調査をみるかぎり、これらの『修養倫理』にひかれた人信者であり、その割合は、「自由」、「平等」、「博愛」というような近代的『市民倫理』に共感したことによる人信者よりはるかに多い。このことは、結局、日本のキリスト教の一部では精神的『第二維新』が志されていて、より多くの信徒においては、社会の積極的革新には消極的な『修養倫理』的受容にとどまっていることを表している。それが日本のキリスト教の支配的な体質にもなるのである」。

(6) 吉野作造「国家と教会」、『新人』一九一九年九月。

(7) 吉野作造「露国の敗北は世界平和の基也」、『新人』一九〇四年三月。

(8) 吉野作造「国家中心主義個人中心主義 二思想の対立・衝突・調和」、『中央公論』一九一六年九月。

(9) 吉野作造「日清戦争前後」、『経済往来』一九三三年一月。

(10) 吉野作造、能勢三郎「行軍日誌」、『如蘭会雑誌』第一号、一九八五年七月。

(11) 吉野作造「本邦立憲政治の現状」、『新人』一九〇五年一月。

(12) 右に同じ。

(13) 吉野作造「木下尚江君に答ふ」、『新人』一九〇五年三月。国家精神が統御するにせよ、各人民が意思するにせよ、国家魂とは、国民国家を形成するナショナル・アイデンティティーに他ならない。

(14) 吉野作造「民本主義鼓吹時代の回顧」、『社会科学』一九二八年二月。

- (15) 吉野作造「民衆的示威運動を論ず」、『中央公論』一九一四年四月。
- (16) 吉野作造「精神界の大正維新」、『中央公論』一九一六年一月。
- (17) 右に同じ。
- (18) (14)と同じ。
- (19) 吉野はウィーンでのデモの印象を次のように日記に書いている。「見物中感ジタルハ(1) 巡査ハ全然看護人ノ如ク人民ニ対シテ毫モ積極的追究ノ態度ニ出ザルコト(2) 人民モ概シテ規律ヲ守リ漫リニ反抗ノ態度ニ出ザルコト、是ナリ」(一九一一年九月一七日、『吉野作造選集』二三卷、岩波書店、一九九六年、二三九頁)。ハイデルベルクに滞在中、往来する労働者の印象についても次のように記している。「此土地ハ金銀細工ノ有名ナル工場ノアル所ニテ土曜日ノコト、テ工場労働者ノ往来頗ル夥シ 併シ何千人ト云フ労働者ノ中一人モ不作法ナル者ナク整然トシテ左往右来シ人ノ迷惑ニナル様ナコトヲセヌハ実ニ見上ゲタ者ナリ 日本ナラバ放歌スル者アリ悪口スルモノアリ女ニフザケル者アリテ到底不快ヲ感ゼザルヲ得ザルナランニ去リトハ見上ゲタ者カナト熟々感心ス」(一九一〇年一〇月二五日、前掲書、一三四—一三五頁)。
- (20) 吉野作造「民衆的示威運動を論ず」
- (21) (8)と同じ。
- (22) 右に同じ。
- (23) 徳富猪一郎『将来之日本』経済雜誌社、一八八六年、二一六—二一七頁。明治初期の知識人のナショナリズムの代表的事例として徳富蘇峰の次の文章が示唆的である。「吾人はわが皇室の尊榮と安寧とを保ちたまわんことを欲し、わが国家の隆盛ならんことを欲し、わが政府の鞏保ならんことを欲するものなり。これを欲するの至情に至りては、あえて天下人士の後にあらざることを信ず。しかれども国民なるものは実に茅屋の中に住する者に存し、もしこの国民にして安寧と自由と幸福とを得ざる時においては国家は一日も存在するあたわざるを信するなり。しかしてわが茅屋の中に住する人民をしてこの恩沢に浴せしむるは実にわが社会をして生産的の社会たらしめ、その必然の結果たる平民的の社会たらしむることを信するなり。すなわちわが邦をして平和主義を採り、もって商業国たらしめ平民国たらしむるは実にわが国家の生活を保ち、皇室の尊榮も、国家の威勢も、政府の鞏固も、もって遙々たる将来に維持するのものとよき手段にして国家将来の大経綸なる者は、ただこの一手段を実践するにあるを信するなり」。
- (24) 山路愛山『現代日本教会史論』、『日本の名著40 徳富蘇峰 山路愛山』中央公論社、一九七一年、三五—一頁。
- (25) 吉野作造「投書家としての思ひ出」、『文藝春秋』一九二六年六月。

吉野作造「明治維新の解釈」、『婦人公論』一九二七年二月。吉野作造は當時を次のように回想している。「今時の年若い青年諸君には分かるまいが、明治も二十年頃までは、一から十まで明治新政府の為る事が癩に障り、伯夷叔斉を気取るまでの勇氣はないが白眼を以て天下をにらみ、事毎に不平を洩らしては薩長嫌厭の情を民間にそゝるといふ底の人物が到る処に居たものだ。……私は薩長にいちめられた方の東北の片田舎に生まれたので割合によく這般の消息はわかる。今から回想して見るに、成る程あゝした類の人物は可なり沢山私共の周囲にも居つて、我々子供の頭に識らず／＼重大の影響を与へた様である。私共が七ツ八ツの頃よく戦争ごっこをして遊んだものだが、「新政厚德」の旗印が最後の勝利を占めたといふでなければ決して局を結ぶことは許されなかつた。

(うじけ のりお・委嘱研究員)

# The Concept of Nationalism in Early YOSHINO Sakuzo

Norio Ujike

In this paper I consider early YOSHINO Sakuzo's nationalism (from Russo-Japanese War to World War I). It is said that the idea to YOSHINO's concept of nationalism is progressive. But, we read his early articles; It is incontrovertible to me that he has the idea of simple nationalism. When having investigated accurately, he was not free of the idea of nationalism. YOSHINO was not ultra-nationalist, but democrat. In this sense, he distinguished nationalism and democracy rather than constructing the theory of democracy. I will discuss both nationalism and democracy aspect of YOSHINO's thought, in detail. This study can help to clarify some thought of nationalism during the Meiji Era.